

地方発 国際貢献探る

岡山で シンポジウム 連携の重要性再確認



シンポジウム「地方からの国際貢献を考える」のパネルディスカッション

奥底で本当に感じるこ
と」が国際貢献につな
がるとし、「国際貢献に
地方も中央もない。国境
もない。自分自身が発信
地だという気持ちで取
り組むべき問題」と訴え
た。

療ボランティアAMD A
代表、内野淳子・岡山県
副知事、阿曾村邦昭・吉
備国際大学院国際協力
研究科長、仲田永造・高
梁ロータリークラブ元会
長、鹿嶋小緒里・岡山大
大学院環境学研究科生の
五人が討論した。

らだ」「相手国の人々が
自立していける支援を行
いたい」など、活動に基
づく意見を発表。「全国
の模範となるような岡山
発国際貢献システムが可
能ではないか」などの提
案もあり、関係機関が連
携する重要性を再確認し
た。(斎藤章一朗)
(詳細は6月5日付紙
面で紹介します)

地方発を視点に国際貢
献の在り方や可能性を探
るシンポジウム「地方か
らの国際貢献を考える」

(山陽新聞社主催)が二
十八日、岡山市駅元町の
岡山コンベンションセン
ター(ママカリフォーラ
ム)で開かれ、約二百五
十人が講演やパネルディ

スカッションに、熱心に
耳を傾けた。
作家の神津カンナさん
が「地球の上の小さな私」
と題して基調講演。神津
さんは、日本の食料やエ
ネルギー自給率の低さな
どを例に挙げ、輸入依存
の実情を「国際貢献して
いただいている立場」と

の認識を示し、その不安
定な状態は「いつどうな
るか分からないというこ
とを考えると、いろんな
ところと手を結んでいか
なければならぬ」と話
した。

さらに「先入観にとら
われず、多様な角度から
物を見ること」や「心の

の認識を示し、その不安
定な状態は「いつどうな
るか分からないというこ
とを考えると、いろんな
ところと手を結んでいか
なければならぬ」と話
した。